

2025年2月22日

## 2024年度「国際哲学特講」アルザス研修報告

法政大学文学部哲学科

君嶋泰明（引率）

### 目次

- 1 概要
- 2 研修の内容
- 3 合同ゼミの内容
- 4 参加学生の感想
- 5 写真でたどるアルザス研修

### 1 概要

「国際哲学特講」は、法政大学文学部哲学科の主催する選択必修科目「哲学特講」の一つです（秋学期2単位）。この科目では、フランスのアルザス欧州日本学研究所（CEEJA）の協力を得て、2月初めにフランスのストラスブール大学（担当：黒田昭信先生）とドイツのハイデルベルク大学（担当：朝・ベッティナー・ヴーテノ先生）との合同ゼミを含む海外研修を行っています。

9月から1月までの授業期間は合同ゼミで扱うテキストやテーマについて学習し、その成果を2月の合同ゼミで発表します。とくにストラスブール大学と法政大学の学生は、日仏混合グループを作り、グループでの共同発表を目指して授業外でも連絡を取り、オンラインでミーティングを行ったりしながら準備を進めます。そして12月を除き、毎月1回オンラインで合同授業を実施し、進捗報告や発表内容の検討を行います（今年度は9月24日、10月22日、11月19日、1月14日）。

本年度の研修は、ハイデルベルク大学（2月5日）とストラスブール大学（2月6日、7日）で合同ゼミを行ったほか、CEEJA 学術部門副所長のレギーヌ・マティアス先生にご講演をいただきました。またゼミの合間をぬってハイデルベルク、アルザスの名所旧跡を見学しました。

## 2 研修の内容

法政大学の参加学生は15名(4年生4名、3年生1名、2年生10名)です。2月4日(火)に出発し、10日(月)に帰国しました。現地では全行程にわたり徳江純子さん(CEEJA 研究・教育部門責任者)が帯同してくださいました。またフランスでの日程ではストラスブール大学日本学科修士課程のジャンネル・ギユルさんが同行し、さまざまなお世話をしてくださいました。とくに、今回は参加学生の中に歩行に配慮の必要な学生が2名いましたが、徳江さんとジャンネルさんの献身的なサポートのおかげでトラブルなく研修を終えることができました。文学部事務の本間美晴さん、障がい学生支援室の田中三恵さんが、事前に懸念点を洗い出し対策を考えてくださったことも大きな助けとなりました。また今回は、旅程の策定や空港の出発・到着時のサポートにおいて、JTBの久保池豊さんをはじめとするスタッフの方々にお世話になりました。研修を支えてくださったすべての皆様に、ここに記して感謝申し上げます。なお、今回研修を成功裡に実施することができたのは、何よりも、上記2名の学生の高い意欲と真摯な取り組み(これはこの2名に限ったことではありませんが)、そして(日独仏問わず)ほかのすべての参加学生による陰に陽にわたるサポートがあったからこそだということも、ここに感謝とともに付記しておきます。

以下、研修の内容を時系列順に、簡潔に記します。

### ■ 2月4日(火)

成田空港発、フライブルク空港到着。

バスでハイデルベルクに移動。ホテル泊。

### ■ 2月5日(水)：合同ゼミ(ハイデルベルク大学)

午前、ハイデルベルク大学にて合同ゼミ。大学の食堂にて昼食。

午後、ハイデルベルクの旧市街見学(学生牢、ハイデルベルク城等)。バスでコルマールへ移動。

着後、レストランにてCEEJAのアカデミック・クラブ歓迎夕食会。

コルマールのホテル泊。

### ■ 2月6日(木)：合同ゼミ(ストラスブール大学)

バスでストラスブールに移動。

終日、ストラスブール大学にて合同ゼミ。

大学近隣で各自軽食を購入して昼食。

ゼミ後、レストランにて夕食。

バスでコルマールに移動し、ホテル泊。

#### ■ 2月7日（金）：合同ゼミ（ストラスブール大学）

バスでストラスブールに移動。

午前、引き続き合同ゼミ。

午後、自由昼食後、ストラスブール旧市街見学（ノートルダム大聖堂等）、フィールドワーク。

レストランにて夕食。

バスでコルマールに移動し、ホテル泊。

#### ■ 2月8日（土）

午前、コルマール市内見学（ウンターリンデン美術館等）。

午後、バスでセレスタに移動、ユマニスト図書館と教会の見学。

バスでコルマールに戻り、フィールドワーク後、レストランにて夕食。

コルマールのホテル泊。

#### ■ 2月9日（日）

午前、マティアス先生による講演。ヨーロッパにおける日本のステレオタイプの変遷を踏まえ、ステレオタイプの利点とそれの孕む問題について講演いただく。

午後はレストランにて昼食後、バスでフランクフルト空港へ移動。

フランクフルト空港から成田空港へ。

#### ■ 2月10日（月）

成田空港に到着。

### 3 合同ゼミの内容

今年度のハイデルベルク大学との合同ゼミのテーマは「ファーストフードとコンビニエンス・ストア・フード——持続可能性の問題をめぐって」です。今回はこれに村田沙耶香の小説『コンビニ人間』を突き合わせて、テーマについて多角的に議論することを試みました。

今回ハイデルベルク大学の参加学生は10名（うち発表者は8名）でした。まず、ハイデルベルク側から以下のタイトルの5つの発表があり、それらをめぐってグループ・ディスカッションを行いました。

- ・ バーガーから弁当まで：日本と西洋のファストフードの違い
- ・ 日本におけるファーストフード、あるいはジャンクフード——公衆衛生への影響および公共の懸念
- ・ 超加工食品があなたの健康と環境を密かに破壊するワケ
- ・ 食品ロス
- ・ 空腹なのに食品ロス・日本における食品ロスの原因・事態・対策

その後休憩を挟み、ハイデルベルク側からさらに以下の3つの発表がありました。

- ・ 食品産業におけるプラスチック消費とその削減対策
- ・ "Plastikflaschen und Resycling" ペットボトルとリサイクル
- ・ 持続可能性に関してのコンビニエネルギー利用

続けて法政側から、今度は『コンビニ人間』について、以下の2つの発表がなされました。どちらもこの作品の提起している問題——人のアイデンティティはいかにして形成されるのか、コンビニ人間とは誰のことか——について、事前に授業で議論した内容をさらに深めた報告となりました。

- ・ 『コンビニ人間』から見るアイデンティティの形成
- ・ 正常なコンビニ人間たち

そのうえで、再度グループ・ディスカッションを行いました。

議論は盛り上がりさまざまな論点が出ましたが、なかでも印象深かったのは、食品ロスやリサイクルなどにたいする日独の取り組みの違いと、それを支える人々の意識の違いが浮き彫りになったことでした。ヴァーテノ先生からは市民レベルで行われている食品ロス削減の取り組みの実例の紹介がありました。議論を通じて、学生は文化の違いを肌で感じることとなりました。

ゼミの後、学生たちは一緒に学生食堂で昼食をとり、親睦を深め、連絡先の交換等を行いました。

ストラスブール大学との合同ゼミのテーマは「ケアの倫理」です。村上靖彦『ケアとは何か』（2021年、中公新書）を共通テキストとし、岡野八代『ケアの倫理——フェミニズムの政治思想』（2024年、岩波新書）を副読本としました。学生はあらかじめ『ケアとは何か』を第1章

まで読んでおき、初回のオンライン合同授業（9月24日）でその感想を発表しました。多様な意見が出て、このテーマがもつさまざまな側面が浮き彫りとなりました。

通常授業では『ケアとは何か』をさらに読み進め、第2回合同授業（10月22日）では、学生一人ひとりがその時点で自分の興味をもっているテーマについて発表しました。合同授業後、この発表を踏まえ、各グループで扱うテーマを決め、グループ分けを行いました。

今回、法政側の参加者は15名、ストラスブルール側は12名だったため、全体を3つのグループに分けることとしました。そして第2回合同授業までに出てきた学生の意見を踏まえ、教員側で各グループのテーマを「①医療・看護・介護・福祉の現場におけるケア」、「②社会・地域・学校・家庭・行政におけるケア」、「③ケアにたいする概念的・理論的・哲学（史）的アプローチ」と設定しました。そのうえで、学生は自分が取り組みたいテーマを選び、それに応じたグループ分けを行いました。結果的にテーマ①は8名、②は10名、③は9名のグループとなりました。

またこれは昨年度から始めた試みですが、意見集約やミーティングの日程調整の困難に鑑み、各グループ内に3～4人の作業部会を作り、それぞれの部会でサブテーマを立て、実質的な発表準備はその部会ごとに行っていくこととしました。このやり方は今回もうまく行き、合同ゼミでは各グループにより内容豊かな発表がなされました。

以下に各作業部会のテーマと発表内容を記します。

	サブテーマ	発表内容
グループ①	信号とサイン——包括的に考える	医療現場でのケアに含まれる患者のサインを解釈するという営みをパースの記号論を用いて理解する
	医療とケア——違いと協力	医療とケアの協力の必要を踏まえ、音楽療法の有効性とケアラーのケアの方策について考える
グループ②	日本とフランスの学校におけるケアの違い	日仏の学校におけるケアの特徴を整理し、両者の違いについて考察する
	日仏における法定代理人制度	日仏における法定代理人制度の概要と共通点を踏まえ、国の担うべきケアについて考える
	ピアグループの重要性——「一緒に話すこと」	日仏のピアグループの事例に基づいて、ピアグループにおいてもっとも肝心なこととは何かを考える
グループ③	ケアの必要性	孤立と孤独の違い、社会的に排除された人々や人間本性についての考察から、ケアの必要性を導く
	ネガティブ・ケイパビリティ	ネガティブ・ケイパビリティをケアラーの応答のあり方の一つとして位置づけ、その特質を考察する
	ケアの成立——居場所作りのために	居場所とは何であり、それが各人の自立や自律にとってどのような意味をもつかを考える

2月6日はこれらの発表のあと、活発な質疑応答がなされました。

翌2月7日には、前日の質疑応答の中で出てきた論点を踏まえて、「居場所」、「自己肯定感」、「必要最低限のケア」というディスカッション・テーマを設定し、グループに分かれて議論を行いました。

両日ともに議論は盛り上がり、ケアとそれに関連する諸問題についてさらに掘り下げるだけでなく、このテーマにまつわる日仏の文化の違いについても理解を深めることができました。また、これまでオンラインでしか話したことのなかった日仏の学生が、対面でのゼミを通してさらに親睦を深めている様子が印象的でした。学生たちはゼミの後、ストラスブール旧市街を一緒に散策し、最後は別れを惜しんで連絡先の交換等をしていました。

## 4 参加学生の感想

帰国後、法政大学の参加学生全員に感想を書いてもらいました。筆者の了承を得たうえで、氏名を伏せたかたちでここに転載します。

### ■学生 A

私は、この研修を通して、価値観の形成は、人が生まれ育った環境が大きく影響していると感じた。それは、どのような人に出会ったか、どのような教育を受けてきたか、ということだけでなく、どのような街並みを見てきたかなどのことも含まれる。

アルザス研修でのディスカッションで、自己肯定感について考える時間があった。私たちは「自己肯定感が高い」という言葉を使うことがあるが、そもそも自己肯定感とはどのようなものであるか、高いとはどのようなことか、ということはこの研修を受けなければ考えることはなかったと思う。このことを考えていく中で、日本の遠慮する性格が根底にあると考えた。相手を尊重する、ということや、遠慮するということはよく日本人特有の感覚であると言われる。しかし、私たちにとってはそれが当たり前の世界で、みんながそうしているから特に意識することはなかった。何かが誰かにとって特有のものであるということに気がつくのは、それが周りとは違うからだということに気づいたのである。

また、ハイデルベルク大学との合同ゼミのディスカッションの中で、ハイデルベルク大学に通っている日本人の学生が「日本人は新しいもの好きだ」とおっしゃっていた。日本では、パン屋さんではパンが一つ一つ袋に包まれていたり、引っ越すときは中古の部屋ではなく新居に引っ越したがる。私たちは、これは普通のことだが、ドイツ人は家などは古ければ古い建物ほど良いと思う風潮があると知った。何でも繰り返し使うから、SDGSにかなり敏感で、ペットボトルなどを捨てるのにも税金がかかるようだ。日本でもそのような活動をすれば良いと思う反面、そのことが影響してプラスチックでできたパッケージが紙にどんどん変わってい

くだけでも前の方が良かったな、とってしまうため、パンがコロナ前のようにビニールに包まれなくなっていけば少し嫌に思ってしまうかもしれないと思った。

海外に行くのは初めてだった為、フランクフルト空港についてからの景色は、私にとってはまるでテレビの中の景色を見ているようだった。日本のような家はほとんどなく、カラフルな外壁にハート型に穴が開けられた窓、決まった時間になると町中に響く教会の鐘の音など、私にとっては全てが新鮮だった。日本にも教会はあるが、大聖堂のような大きな教会は訪れたことがなかったので、大きなステンドグラスが嵌められたキラキラとした景色は一生忘れられないものになった。このような、昔ながらの景色が町中に溢れていることは、価値観を形成する上でも大きく影響を与えていると考えた。先述のドイツでの合同ゼミのディスカッションでの、古いものほど良いとする風潮はこのような街並みが今でも残っているからだとする。どちらが良いというわけではなく、お互いの考えを理解し、尊重していくことは、今回のストラスブール大学との合同ゼミでのテーマでもある、ケアにも関係があると考えた。今回のアルザス研修は、目に見えたもの、触れたもの全てが刺激になり、全てが学びになっていると感じた。

## ■学生 B

私はこの研修で自身の知見やもっていたステレオタイプに気づくことができた。私は哲学科とは、考えることを研ぎ澄ます学科であると考えている。この研修ではたくさんの方のことを、考えたことでたくさんの方のことに気づきを得られた。そのことについて以下でまとめたいと思う。

まず初めに私はこの研修に参加するか迷っていた。それは友人との参加ではなく、一人での参加であったからである。しかしそれも杞憂であったとすぐに気づかされる。研修が始まれば、みな少しずつ打ち解けていき、同じ部屋にいる友人に至っては毎晩話すため、確実に仲は深まっていった。「研修の成功」と「研修を楽しむ」という目標を持つ者同士、一体感が生まれ友人の存在がそのまま、これらの目標の達成につながるということである。

ドイツにてドイツの学生と交流した際に自身の二つのステレオタイプに気づいた。一つ目はドイツの学生は寡黙なイメージがあること、そしてもう一つはあまり笑わないというステレオタイプだ。ドイツの学生と交流していきこの二つのステレオタイプとリアルギャップに驚いた。ドイツの学生は寡黙ではあるが発表において意見をしっかり持ち、発言する。ユーモアにも富んでいてよく笑う。このように自身のイメージとの差に気づくのと同時に、ステレオタイプの存在に気づくことができた。ドイツの学生とのディスカッションではおもに食品ロスについて話し合った。ドイツで生活している学生たちだからこそその意見や視点が

垣間見えて非常に有意義なディスカッションであった。ドイツでの学食ではヴィーガンメニューが大半を占め、ドイツの学生たちの一人一人の環境への意識の高さに驚いた。日本の学生は選挙などにおいても、一人が行動しても皆が行動しなければ意味がないと考え、投票すらしめないことも見られる。日本人は意識においてはまだ先進国とは言えないと考える。

フランスにてまず驚いたことは、大学の便器に便座がないということである。日本人は水周りに関して丁寧すぎるということかと考えさせられた。そして大きく感銘を受けた点が、些細なことでも質問するということだ。これについては黒田先生がおっしゃっていたが、小さい質問でも大きな核心に迫ることがあるということである。実際フランスの学生の質問には助けられ、小さい質問の重要性に気づかされた。またフランスの学生のフレンドリーさにも感銘を受けた。最終日の講演会についてはステレオタイプについて非常に興味深く、今回のレポートにも影響を受けた。

今回の研修を通してステレオタイプについて気づかされ、ディスカッションや自由時間では考察する材料がたくさんあり、有意義な研修になった。また我々が快適に研修を行えるように尽力してくださった CEEJA の徳江さんや君嶋先生、黒田先生、サポートしてくださったすべての方々に感謝したい。

## ■学生 C

### 「人の素晴らしさ」

2/4～10の1週間ほどの日程で行われた国際哲学特講。現地に足を運ばなければ分からない素晴らしさ、人のありがたみを存分に肌で感じた研修だった。

最も印象に残っているのは、ストラスブール大との合同ゼミである。『ケアとは何か』を題材に、10月からの月1回の zoom を使用した合同ゼミを通して意見交換し、日本とフランスの「ケア」に関する制度や捉え方の違いについて話し合うだけでなく、直接会う前からお互いのことをある程度知った状態を作ることが出来ていたため、アイスブレイクや話し合いが非常にスムーズに進んだ。

話し合いの中で最も印象に残っているのは「自己肯定感」についての議論である。具体的に言うと、日本とフランスでは同じ「自己肯定感」という言葉であっても使用する場面が異なり、その意味合いや受け取り方も大きく異なる。フランスでは「自己肯定感が高い」という言葉を「前向きでポジティブ」というプラスの意味として捉える一方で、日本では皮肉として使用されることが多い。「出る杭は打たれる」ということわざが存在するように、自分を高く評価することは「自信家」という見られ方に繋がり、「自意識過剰」「目立ちたがり屋」というレッテ

ルを貼られることに繋がるからであろう。日本人の自己肯定感が低いことが度々話題に挙がるが、合同ゼミでの議論を通して、日本人の自己肯定感が著しく低い原因は「自身がないこと」「自己主張が苦手なこと」という結論に落ち着いた。自己肯定感についての議論からわかるように、言葉一つとっても国によって受け取り方や実態が異なり、国ごとの文化や実態を色濃く反映しているということに改めて気づかされた。加えて今回の合同ゼミの最大の特徴は現地の学生と日本語で議論ができたことであった。彼らは日本語学科であったことから日本語レベルが非常に高く、日本人とも卒なく会話することが出来ていた。彼らが日本語を熱心に習得しようとしている姿を見て私自身も非常に刺激を受けた。改めて英語、フランス語をもう一度学び直したいと強く感じた。

ストラスブール大とのゼミを通して仲良くなったジャネル。彼の人間性の良さに終始心を奪われていた。ストラスブール、コルマルの自由行動、そしてご飯を食べるときもずっと気にかけてくれていた。ストラスブールでのカテドラル大聖堂の中で、階段が非常に急であり苦戦している中でさげなく手を貸してくれたことは鮮明に記憶に残っている。5日間のフランス滞在を通して彼に助けてもらった回数は数えきれない。観光面はもちろん言語の面でも然りである。今年中には絶対にもう一度フランスを訪れるので、ジャネルとの再会を心待ちにしている。

最後に、研修を通して常に気にかけてくださっていた君嶋先生、徳江さん、そして研修と一緒に参加することができたみんなに心からの感謝を伝えたい。もし国際哲学特講に参加するかどうかわ迷っている学生がいるのなら絶対に参加してみしてほしい。現地の人たちと関わることでしか得られない気づきがあると断言する。

## ■学生 D

今回の海外研修で私が特に印象に残っていることは大きく分けて二つあります。それは、①現地の学生さんとコミュニケーションを取ることのおもしろさ、と②出会った全ての人の優しさです。

まず①について、特にドイツのハイデルベルク大学の学生さんで行ったディスカッションの中で考えたことについて述べます。私の班では、特に食品ロスの問題についてディスカッションを行うことが多かったのですが、会話のなかで文化や価値観の違いを感じるが多々ありました。特に興味深く思ったのは、環境問題や食品ロスの問題への根本的な意識の違いです。日本では、私も含め、社会問題に対して「社会全体の流れは変えられないのだし、仕方のないことだ」と気持ちを納得させている人が多く、問題改善のための行動をとる人は少ないと感じています。しかしドイツでは、ペットボトルのリサイクルやユースボトルの使用

などが積極的に行われていることから分かるように、社会全体として経済的な効率性や合理性よりも環境保護が優先されているようでした。私は、日本とドイツにこのような意識の違いがある理由を知るために、ディスカッションでお話を伺ったのですが、中でもハイデルベルク大学の学生さんが仰った「ドイツでは環境問題や社会問題などは、自分の問題として考えられている」という言葉がこの問題の本質を捉えていると思いました。個人ができることの限界を認識して自分自身の行動を諦めてしまうのではなく、一人一人の個人が自分の行動を選択していき、それが社会全体の流れを変えていく、という民主主義の意識がしっかりと根付いている所が、まぶしく、とても魅力的に思えました。

他にも、ディスカッションではお互いの国の文化を伝えあって、文化の違いからテーマの本質に迫っていかこうとする試みが多くみられたのですが、お互いにとって未知の国の文化を、相手が放った言葉から想像して理解することに、おもしろさと難しさを感じました。現地の学生さんの言葉から、相手の国の文化や暮らしを想像することも難しかったのですが、私が驚いたのは、現地の学生さんに対して日本の文化を説明することにもかなりの困難があったことです。日本語を母国語とする私たちであっても、自分の中のイメージを言葉でうまく表現できなかったり、前提知識が違うために、伝わると思った説明で伝わらないことがあったりしました。しかしそれ故に、言葉の言い換えや身振り手振りをを用いて工夫しながらコミュニケーションを取ることが出来たのが、おもしろかったです。

ドイツの学生さんでも、フランスの学生さんでも、このように日本語でお話やディスカッションを行えるほどに日本語を習得するためにはどれだけの苦勞と努力があっただろうと、強く尊敬の気持ちを抱きます。それとともに、異国の文化を背景に持つ学生さんたちとの交流を通じて、コミュニケーションの本質は、「言葉が分かること」よりも「伝えたいことが伝わること」にあるということに気づくこともできました。とても貴重な経験をすることができて感謝しています。

次に、②について、フランスで出会った方々との交流を中心に述べたいと思います。この海外研修では、フランスに滞在する期間が長くあったのですが、この期間に私は、本当に沢山の人の助けをいただきました。ストラスブール大学の学生さんたちは足が悪い私をたくさん気遣って、荷物を持とうとしてくださったり、「大丈夫ですか？手伝いましょうか？」と何度も声をかけてくださいました。観光の時も一緒にいてくださって、皆と同じペースで歩けない私でも、とても楽しく楽しく過ごすことができました。一緒にいて色々説明をしてくれたり、一緒にびっくりして驚いてくれたり、時には一緒に迷ったり。。学生の皆さん全員にたくさん感謝の気持ちがあるのですが、特に一緒にいてたくさん親切にしてくれたマリンさんとノエルさんに深く感謝しています。

また、フランスのホテルの方やお店の方もとても親切にしてくださいました。特にお土産のお菓子を買った店で行った店で、おまけをくださったお店があります。私はとても親切にくださったのでびっくりして泣いてしまって、それを見たお店の方がとても励ましてくださいました。私は本当にたくさんの人に助けられて旅を終えることができました。

長くなってしまいましたが、最後にこの研修に行くにあたって、私に力を貸してくださった沢山の方にお礼を述べて終わりたいと思います。足が悪い私の荷物を持ってくれたり、あたたかい声掛けを沢山してくれた日本の学生の皆さん、歩くのが遅い私にペースをあわせて歩いてくれた友達、沢山の心配事があるなかでも、いつも穏やかに親切に気にかけてくださった君嶋先生、複雑な旅程の中で私たちが最大限楽しめるよう、様々に工夫して考えてくださった徳江さん、研修に行くにあたって何度も相談にのり、問題とその対策を考えてくださった障がい学生支援室の田中さん、現地で苦労しないようにと一緒に考えてくれた家族、そして、優しくあたたかく応援してくださった現地で出会った皆さんに、深く深く感謝しています。沢山感動して、感謝した海外研修でした。ありがとうございました。

#### ■学生 E

今回の国際哲学特講に参加しようと思ったのは、ケアと倫理というテーマに興味があったためである。つまり、テーマが明らかになっていなかった4月の時点では、私は全く履修する気がなく、むしろ私にとって海外に行くことは非常に勇気があることであり、消極的になってしまって、履修を避けていたところすらあった。しかし偶然追加募集の話があり、折角だからと聞いた説明会でテーマを知り、加えてコルマル市街の伝統的な建物を見てみたいと思い、申し込みをした。

他の学生に比べると、不純な動機だったかもしれない。しかし結論から言うと、私はこの授業を通して多くの挑戦をすることができた。

一つ目はグループディスカッションが苦手であるにもかかわらずグループのまとめ役なったことである。LINE を使い日程調整をしながら、zoom で日本とフランスの両学生が関わる時間を設け、発表に向けて準備を行った。一時はプレッシャーで潰れそうにもなったが、それでも話し合いが頓挫することなく、現地でも充実した時間を過ごすことができたのは、フランス側の学生の語学力の高さが大きな理由の一つにある。ミーティングの際には、法政側だけでなく、フランス側の学生も多くの意見を出してくれたおかげで、内容がより深いものになっていった。異国語で哲学をするというのがいかに難しいことであるか、私には想像もつかない。しかし、現地ではハイデルベルク大学とストラスブール大学の両方の学生が大いに助けてくれ、私は海外でも日本と同じように活動ができる安心感とともに、日本語しか分からない

自分の語学力の乏しさに悔しい思いがした。

二つ目は、海外の学生に向けて発表をすることである。私たちが調べた内容について基礎知識が無く、かつ多少なりとも言語の壁がある人に対するスライド・原稿作りは、通常の発表よりも配慮すべき点が出てくる。私は難しい言葉を避け、スライド一枚における文字をなるべく少なくするように工夫し、読みやすいフォントや視覚的に分かりやすい図形を使用するなど、気を遣って準備した。この準備の段階で、一種のケアを意識することができたことも良い経験であったと思う。また、ありがたいことに、ハイデルベルク大学での研修の方でも発表の機会を頂けた。その際、先生方がスライドの見やすさを褒めて下さり、発表に対する自信も上がった。

出発前には不安が大きかった研修だが、現地の学生と関わり、観光地で地域の方と関わり、歴史ある建物の美しさに触れ、いつの間にかまた海外に行きたいと思うようになっていた。これまで無意識に避けてきた異文化を直に感じ、多くの人とコミュニケーションをとったことは大きな刺激となった。今回の授業においては、自分以外の学生や先生方、CEEJAの方々のサポートのおかげで、海外へのハードルが下がったように思う。そして、今度は異国の地でより主体的に行動できるように、語学の勉強にも力を入れたい。今回の授業は、今までの、そしてこれからの自身に対する新しい挑戦のきっかけになる貴重な機会であったと思う。

## ■学生 F

私にとって今回の国際哲学特講の研修は、実際に海外に行った時間はもちろん、それ以外の時間からもたくさんの学びを得ることができた、とても良い経験だったと思いました。その中で特に2つの点を挙げようと思います。

最初に述べるのはストラスブール大学でのゼミ発表についてです。今回のゼミ発表では、「ケアについて」をテーマとして扱いました。日本とフランスの学生が、ケアについてそれぞれが興味のある分野ごとに3つのグループに分かれ、そのグループの中でも3~4人の小グループに分かれて発表の準備を進めていくという流れでした。私が所属したグループは自分を含めて日本人学生が2人、ストラスブールの学生が2人という構成でした。発表への準備を進めていく中で、難しかったことはいくつかあります。まずは、テーマ決めです。3つのグループに分かれて、そこからさらに小グループに分かれたとはいえ、「ケア」という概念が大きいものであるため、そこから10分程度の持ち時間の中でどのような話題を扱えば良いかという問題に頭を悩ませました。また、テーマを決めた後、10分間の発表に向けて、どのような段取りで作業を行なっていけばいいかという問題もありました。私にとって、複数人で協力して発表を完成させるという経験が初めてだったので、それぞれがどのように作業を進めてい

けぼうまくいくのかがわからず手探りで進めていきました。発表の準備を進めていく中で大切だと感じたことは、毎週会議の時間を設けるということです。1人で作業を進める時間をたくさん取るよりも、毎週30分や1時間でもいいのでコミュニケーションの時間を設けて、調べたことや自分の作業の進捗を確認することで、細かいステップで作業を進めることができ、滞ることもなかったように思います。また、他にも会議をしていく中でよかった点としては、会議全体を通して議事録を作り、毎回次回の会議までにやっておくことと、次回の会議でやることを決めておくことです。それがあると、次の会議をスムーズ始めることができ、そのおかげで会議の時間も短くなり、毎週の限られた時間の中でも時間をセッティングしやすくなったと思います。こういったことのおかげで、本番の発表もうまく成功させることができたと思います。

もう一つは海外渡航についてです。私にとって海外に行くのがこの研修が初めてだったので、なかなかハードルが高かったのですが、この研修で多くの新しい知見と経験を得られました。研修に行く前、私は知らない言語に対する不安が強く、言語の違う国に行くには、その国の言語を学ばないとほぼほぼコミュニケーションをとることができないのではないかと考えていました。しかし、実際に海外に行ってみると、言葉を理解していなくても表情やジェスチャーで伝わることの方が多く、日常のコミュニケーションにおいて、いかに非言語的な表現が重要であるかを感じました。また、現地では大聖堂をはじめとするゴシック様式の建造物を見ることができ、教科書や写真では伝わらない迫力や存在感を感じることができました。お金に関しても、自分で実際に外国の貨幣を使ってみることで、物価の違いや世界から見た日本の経済事情を聞くだけでは無くて実感することができ、とても良い経験でした。

この他にもたくさんの学びがあった中で、私が研修全体を通して感じたことは「やってみる」ことの大切さです。外国の文化について、インターネットや本などで知識としては知っていても、実際に国を訪れて自分の目で見ることで今まで固まっていた自分の中の外国のイメージが変わりました。この研修をきっかけに、自分の中の固まっているイメージ改革のようなことを今後もしていけたらと思いました。

## ■学生 G

研修中に何度も思ったのは、根は皆一緒であるということである。国や文化が違えど繋がりが合い、心を通じ合わせることができる。

まず、特講の授業は日本でもドイツ・フランスでもグループ活動が多い楽しい授業であった。特にストラスブールの学生とは、グループが決まってから数ヶ月の間何度も zoom で会議をした。私たちはケアの倫理の中でもピアグループをテーマにしたが、当初は中々意見が出せず

テーマも決まらなくて大変だった。しかし zoom を重ねていくにつれ仲間である大津さんやスト大のリザと仲良くなることができ、発表をすることができた。ハイ大やスト大で議論をしている間は文化の違いこそあれど、様々な意見を言い合い、深めることができた。また、日本が移民に義務教育を課していないことや法定代理人の詳しい制度など、話し合いの中で日本についてでも知らないこともあることを知った。

また、現地研修では様々な人に助けられた。ストラスブールで自由昼食のために解散した時、スト大のエミリと一緒にご飯を食べようと誘ってくれた。エミリが私たちの代わりにフランス語を読んでくれたおかげで美味しいピザを食べることができた。読んでいる途中で大量のチーズの名前が書いてあるピザがあり、「う～ん……これはめっちゃチーズ！」と満面の笑みで言われたことをよく覚えている。他にもコルマルでクッキーのお店に入ったときは、店主さんがアルザスクッキーを試食させてくれた。ウンターリンデン美術館のショップでは、店員さんが日本まで大切に持って帰れるよう陶器のお土産を何重にも包装してくれた。こういう小さな親切や優しさは私が日本でも受けた覚えがあるので、やはり思いやりの心は万国共通であることを再認識できた。

ハイデルベルクで行った学生牢では、初めは牢に入ることが罪を犯し反省するためだったがいつしか武勇伝になったという話を聞いた。べてるの家では弱さを強さにすることを目標にしていたが、逆境をも楽しむ人間の強さという共通点を感じられた。

最後の講演会ではステレオタイプについて学ぶことができたが、この旅を通じて人を大きな括りで決めつけないことの大切さに気づかされた。相手はフランス人だから。年上だから。そうやって私とは違うんだと思わず、同じ人間として対等に接することで、その人の心に触れることができる。リザやエミリだけでなく、ハイ大のアーナやリチなど、現地の人々と交流した経験があったからこそ、最後の講演には共感する部分が多くあったように感じた。

現地の人と仲良くなり友達になることができた。それだけでも十分な収穫なのに、議論で知識を得たり美しい景色や美味しい食べ物に感動できたりと、この度で得たものはとても大きい。

現地の生徒はもちろんのこと、案内や調整をしてくれた徳江さんや君嶋先生、黒田先生、事務の方々がいなければこの収穫はなかっただろう。旅を振り返ると感謝の言葉が尽きない。長い間準備のために尽力してくださり、本当にありがとうございました。

## ■学生 H

私は、今回の国際哲学特講を通して、自分と異なる文化や言語を用いて暮らしている人々について、実際に体験することの大切さを学んだ。これまでの国際哲学特講の参加者と同じよ

うな感想になってしまうかもしれないが、日本で学ぶことと現地で学ぶことは大きく違うということを今回の研修から強く実感した。確かに知識として自分で調べて知ることも一つの理解につながるが、現地に行って実際に体験すること以上に異なる文化圏の人々について理解することはできないのだと実感した。もちろんドイツやフランスのどちらにおいても、イメージや知識通りのこともあったが、やはり生身で体験することは私にとって大きな学びを与えてくれた。

まず、フランクフルト空港とストラスブール大学近くのパン屋で食べたプレッツェルの違いである。フランスパンが硬いものだと知っていたため、フランスで食べるパンはどれも硬いものではないかと心配していたが、実際に食べてみると、むしろドイツのプレッツェルの方が硬かった。もちろん店によってある程度の差はあると思うが、ドイツで食べたパンは中が柔らかく、外はカリカリしたものが多く、食べ始めに少し苦労した。一方、フランスのパンは出来たてを食べることができなかったにも関わらず、ほとんどが柔らかく、食べるのにそこまで苦労しなかった。今回の研修の中では、ドイツ・フランス問わず朝から晩までパンを食べることが多かったが、どれも美味しく食の面において非常に楽しむことができた。

次に、ハイデルベルク大学やストラスブール大学との合同ゼミである。ハイデルベルク大学では、テーマである食や『コンビニ人間』よりもお互いの文化について日本語で話すことができた。例えば、ドイツにはコンビニの代わりに24時間営業のガソリンスタンドのショップや、夜だけ開いている店があるという話は大変興味深かった。その点について詳しく聞くことはできなかったが、高速道路が無料であることも考えると、車を使う人が多いのだと思った。また、ケントさんの、ドイツではプラスチックやガラスに対してデポジットを払う必要があり、リサイクルやリユースにおいて日本よりも高い回収率であるという話は少し意外であった。なぜなら、私は海外に比べて日本の方がリサイクルを推進していると考えていたからだ。実際に日本の回収率自体は高いが、その中の25%は、結局燃やされたり埋め立てられたりするということで実際にリサイクルされていないと考えると、日本におけるリサイクルの定義を見直す必要があるのだと思われる。

一方、ストラスブール大学での合同ゼミでは、事前から準備していたこともあり、発表もディスカッションも興味をそそられた。特に、二日目の「居場所」についてのグループディスカッションでは、居場所における他者の必要性が論点の一つとなった。話し合いの結果、実際に他者がいる場合だけでなく、独りである場合においてもその場所に居ることを他者によって認められている点において潜在的に他者とのつながりを感じているのではないかという結論に至った。また、黒田先生からも話があったが、共依存についても話題に挙がった。詳しくは話し合うことができなかったが、私は「過剰居場所化」につながっているのではないか

と考える。共依存の人は、お互いの関係に固執し、お互いのケアにだけ夢中になっているため、他の居場所を見つけようとはせず、むしろ安心することができないように思われる。このように、様々な話題について意見交換ができたことは、お互いの考え方に関する文化理解を深めることにつながった。

また、大学以外での観光もまた大きな学びにつながった。特に、言語の違いが私にとって高い壁となった。大学内やストラスブール観光においては、日本語学科の方々に助けをもらいながら、観光することが出来たが、コルマルの自由行動では大変苦勞した。最初はフランス語だらけで、文字も話も分からず困惑し、街に取り残された感覚があった。しかし、昼食のためにカフェに行った際、店員に対して英語でコミュニケーションを取ることができ、ようやく観光客として認められた気がした。そのカフェのトイレには、日本語も書かれており、コルマルという街に歓迎されている気すらした。その後、街を散策していると日本のサブカルショップもあり、やはり日本のアニメや漫画、ゲームが日本とフランスの懸け橋になっているのだと実感した。

まだ書きたいこともあるが、最後に、今回の研修を準備してくれた様々な方々に対する感謝で締めたいと思う。現地でお世話になった JTB の方々や徳江さん、ジャネルさんを始めとして、ストラスブール大学やハイデルベルク大学の日本学科の生徒たちだけでなく、研修前からお世話になった本間さんや黒田先生、君嶋先生には感謝しています。特に、黒田先生と君嶋先生には、忙しい中、発表に関する連絡に対して提案や支援をしていただき、深く感謝申し上げます。今後もこのような貴重な交流が続いていくことをお祈りしております。

## ■学生 I

ハイデルベルク大学との合同ゼミではファストフードとコンビニエンスストアフードについて考えた。日本とフランスではファストフードの概念が違う。日本にはお弁当などがあり健康と季節感を重視している。だがフランスはシンプルさと味の一貫性を求められている。ファストフードなどを食べ続けることで両国ではプラスチックのゴミ問題、食品ロス、健康問題などが課題となっている。どうしたらこのような問題を解決できるのだろうと考えたときに自炊を増やせばいいのではという意見が出た。だが近年野菜などの値段が高騰していて自炊の方が時間がかかる上に値段が高くなることもあり良い解決策を見つけることができなかった。便利さの裏側には必ず代償があるということをこの合同ゼミで学ぶことができたので日本に帰ってもこの問題について考えたいと思う。

ストラスブール大学の学生とは秋学期からケアについての合同ゼミの準備をしていた。他の班の発表を聞くことで自分たちの考えが深められられる部分や足りない部分を見つけるこ

とができた。発表もすごく良かったがそのあとのディスカッションがすごく充実していた。発表の準備だけでは自分たちが決めた視点からしか問題を考えていなかったが他の班の発表を聞くことで色々な問題が結びついて新たな気づきがたくさんあった。承認欲求、自己肯定感についてをメインで2日目のゼミでは話し合いをした。何気なく使っていた言葉の意味を考えるとというのは難しかった。親の世代ではどういう言葉で表されていたのか、フランスにはなぜそういう考え方がないのかなどを話していくうちに辞書的意味から少しずつわたしたちのわかりやすいように言葉の意味が変化しているということを知った。この話題についてはまだ話し合いをしたいと思った。

ヨーロッパに行ったことのある人からお店の人は無愛想だと聞いていた。だがお店に入るとは“Bonjour”、お店を出る時は“Merci”というとても愛想が良かった。日本ではお店に入るときに挨拶をする文化があまりないので新鮮な気持ちになった。言語は違えど挨拶は人と人の心を通わせるのだと改めて感じた。教会や旧市街地など当時の街並みがたくさん残っていて戦争の悲惨さや自分たちの国を守ろうとする人々を感じ取ることができた。歴史的背景などの知識を得てからもう一度訪れたいと思った。

CEEJA の方の講演会ではステレオタイプについて考えた。ネットで日本のステレオタイプについて調べてみたら日本人は眼鏡をかけていて真面目というのが出てきた。今回の研修でフランスの学生の方が眼鏡をかけている人が多いのではと感じた。ステレオタイプというのは年々変化していくものなのだと感じた。インターネットの普及により日本にいても海外の情報を手に入れられるしその逆も可能だ。だがそれが正しいのかを見極める必要がある。その国独自のステレオタイプはもちろん存在するけれどそれにとらわれず個人個人を見るのが大切だと感じた。

この研修を通して様々な視点を持つことの重要性を改めて感じた。ケアについては秋学期通して考えてきたテーマだったが実際に会ってゼミをしたときに考え方の違いを感じたり、日本で使っている言葉をフランス語に訳すことの難しさを感じた。承認欲求という言葉の意味を伝えるなら承認欲望の方が同じニュアンスで伝えられると分かった。いろんな考え方の人と議論をするからこそ新しい疑問が生まれさらに考えを深めることができるととても有意義な時間を過ごすことができた。

## ■学生J

私が苦手意識を持っていることの代表例として、学問と旅行のふたつが挙げられる。知識不足、準備不足、無意識の偏見、論理の破綻、語学の弱さ、すぐにパニックになるところなど、理由を挙げ出せばきりが無いが、苦手なふたつどちらにも共通する弱点と言えよう。

今回のテーマはケアである。受講を迷っているとき、先に参考書を読んだ。参考書の村上靖彦『ケアとは何か』において、ケアのゴールは、「患者の苦境や当事者が自分の力を発揮しながら生き抜き、自らを表現し、自らの願いに沿って行為すること」としていた。ならば、弱点が多く、常に自らへの配慮をしなくてはならない私は、常にケアへのゴールに向けて邁進しているのかもしれない。私がケアに対して共感を覚えた瞬間であり、これを学ぶためであれば苦手意識は問題ではないと思えた瞬間であり、結果としてそれは受講の決意という形で現れた。

そうして講義は始まり、フランス人学生とのディスカッションも始まった。困難は山ほどあった。ケアに関してのテーマ決めや関連書籍を調べることなどはもちろんそれである。本当にこれは論理的か、説得力はあるか、そもそも適切な理解ができているのか、迷いながら本を読み、原稿を書いた。また、予想以上にコミュニケーションに力を入れる必要もあった。県外にすらほとんど行ったことがない私からしたら、国外の学生というはおそろしく遠い存在に思えた。文化的背景が全く異なる世界、画面の先でしか見たことのない場所で暮らす人々と交流する、まさしくファーストコンタクトである。慎重に一言一言自分の考えを相手に伝え、注意深く相手の意見を聴く。普段であっても難しいのに、意識してしまうとさらに難しくなる。しかし、この意識する、という部分が重要である。知らないことを知ることはできないし、疑っていないことを疑うことはできない。今まで私はコミュニケーションができていたのだろうか、論理的な論の組み立てができていたのだろうか、私が自認する理解は理解だったのだろうか。フランス人学生という存在は、翻って私へ相対的視点を与え、今まで意識外にあった事柄についての考えを提示してくれた。

実際にドイツ・フランスに赴くと、やはり日本と異なるものが目に付く。言語はその国の言葉が圧倒的に多く、体格はがっしりと大きく、顔つきも異なる。主食はパンで、いったい何が入っているのか分からない食べ物も多くあった。街並みも、レンガ造りにカラフルな屋根、都市部で合っても高層ビルはなく、代わりに横の面積が広い建物が並ぶ。信号の形も、道路の形も異なる。本当に異世界に来たような心地がした。

そうしてゼミが始まる。初日はハイデルベルク大学にて、環境とコンビニにまつわる発表会とゼミが、二日目、三日目はストラスブール大学にて、ケアをテーマにしたゼミがあった。どちらも大変実りのあるものであったと思う。日独仏どの学生もよく発言し、同意できる点は同意し、反対すべき点は反対する、結果全体として考えを広げていける、というある種理想的な議論が行われていた。ハイデルベルク大での発表で、ドイツにおける環境にまつわる制度について発表した方がいた。ストラスブール大で、フランスにおける後見人制度について発表したグループがあった。それこそ、知ろうとしなければ知ることができない、知ろうとし

ても理解が難しい領域である。このような領域について少しでも知ることができたというのは大変貴重であるし、全く知らないことを知ることができた、という経験が、今後自分の関心を広げていく自信になった。また、私自身の発表においても、良かった点、改善すべき点が見え、今後の学びにおいても生かせる経験になった。

現地での観光、フランス初日のフードファイト、フランスのパン屋で出した勇気、空港で起きた「Coke OK?」事件など言語化したいことは多くあるが、今回のテーマはゼミということで割愛させていただく。

末筆になるが、今回引率をしてくれた君島先生から、現地で非常にお世話になった徳江氏、現地との折衝を行ってくれた法政大学文学部担当の本間氏、現地において積極的に交流してくれたドイツ、フランスの学生のみなさん、同じプログラムに参加した日本の学生のみなさん、果ては私のつたない英語を聞き取ろうとしてくれたフランクフルト空港の店員まで、非常に多くの人々の支えがあり、こうして無事にプログラムを終えることができた。今回のメインテーマであるケアを、身をもって実感しながらの7日間であった。関わってくださったすべての方に、心から御礼申し上げたい。本当にありがとうございました。

## ■学生 K

私はこの研修で、日本の中からでは体験できない多くのことを体験し、数えきれない大切な思い出とともに多くの新たな知見や学びへのモチベーションを得た。

新たな知見という意味では、ハイデルベルク大学でのゼミは特に刺激をもらった。ハイデルベルク大学の学生は、日本人よりも日本の問題がよく見えているようだった。消費者の利便性を重視しすぎるがあまり環境や健康意識への配慮がおざなりになっている日本の現状を指摘され、その環境に甘やかされてきた人間としてはとても耳が痛かったが、よりよい日本にしていくためには必要な指摘であり、問題意識においても具体的な対策においてもドイツから学ぶべきことは多いと感じた。外国で外国人と日本の問題について論じるのはとても面白く、日本人としてではなくただ一個人として、外から日本の姿を眺めているような不思議な感覚があった。これは外国でしか得られない体験であり、今後生きる新たな視点を得たと思う。そして、無気力な停滞にぬくぬくと居座ることを選ぶのではなく、自分の住まう世界がどのような在り方をしているのかしっかりと目を向け、その世界の舵切りに自ら参入していく責任意識が、哲学科で学ぶ者として最も必要な態度であり、自分に欠けていた姿勢だったと気づかされた。

外国から見た日本といえば、最終日に聞いた他文化へのステレオタイプや偏見についての

講義は、ネガティブなものからポジティブなものまで様々な外国人の日本への認識を垣間見ることができて面白かった。現地での自分の体験も併せてリアルな外国から見た日本を知ることができたと思う。

しかし同時に、この研修では、日本人だから、ドイツ人、フランス人だからという一括りで相手に接するのではなく、ひとりひとりの一個人として相手を知ろうとすることの大切さも知ることができた。特に、ゼミやその準備期間、観光も含めて長い間共に行動してきたストラスブールの学生の方々は皆、慣れない日本語で、こちらに歩み寄ろうと一生懸命コミュニケーションを取ろうとしてくれていた。本来は私のほうから積極的に会話しなければならなかったのに、むしろあちらから声をかけてくれることが多く、自分のコミュニケーション能力を反省すると同時にストラスブールの学生の方々の積極性や言語や文化の違いを恐れない勇気にとても心打たれた。こうした文化の壁を壊して関係性を構築するためのコミュニケーションには間違いを恐れないことと何より相手を知りたいという気持ちや仲良くなりたいという心が必要なのだと知った。

最期に、この研修に関わった人たち皆に感謝を伝えたいと思う。この研修が無事に終われたのは、君嶋先生、事務の本間さん、CEEJAの徳江さんや現地の方々など、多くの人たちの支えのおかげであり、そこには多くの目に見えない苦労や尽力があったのだろうと思う。現地との橋渡しをしてくれた方々に感謝と敬意をもって、この研修で得た学びを自分の今後に最大限活かせるよう、これからの学業に励んでいきたいと思う。

## ■学生L

ハイデルベルク、アルザスでの研修は学びに満ちたものでした。概念や推論の結果として知っているものに直接相對したことは、これからの学習においてもよい影響を与えるのだと思います。最終日にCEEJAのRegine Mathiasさんがしてくださった講演は、ステレオタイプと偏見に関するものでした。日本などの異国からドイツの大学の学生やフランス人について考える場合、こういった対象をカテゴリーの単位で統一的に理解してしまう傾向があります。実際にはそういったカテゴリーのレベルでの特性や傾向性が存在しなくとも、この方法は分かりやすく単純であるためしばしば”有効”なものとして利用されてしまいます。実際に現地に行き学生や人々と関わったことは、こういった粒度の低い理解から脱却して、ステレオタイプにとらわれずに考えるために必要なことであったと思います。

今回のストラスブール大学との合同ゼミのテーマは「ケア」でした。このケアというものは非常に広い概念でして、単に医療や介助の現場のみならず人間の根源的な部分や一般的な人間関係においても有効なものです。一般的にケアにおいては、ケアする側のケアラーとケア

を受ける側がそれぞれ固定的なものとして考えられています。しかし村上靖彦はこの関係を交換可能なものとして捉え、相補的なケアの形を提示しました。私はハイデルベルク大学とストラスブール大学の学生との交流のなかで、こういったケアの相補性について感じる場面がいくつもありました。このような日本語を使った交流の場がドイツやフランスで開かれるということは、向こうの学生が言語的にこちらに向けて譲歩し、対話の場を開いてくださっているということでもあります。こういった背景があり、向こうがこちらと対話するために働きかけてくれている。これに対してわれわれの側では、これについて自覚することによって、積極的に応答していくことが意欲されるようになりました。

経験の細部を提示するのであれば、ハイデルベルク大学の学生とは日本とドイツにおける持続可能性への取り組みについて議論し、ナッジの可能性について深く考えることができました。ストラスブール大学の学生とはケアの根本的な条件について議論し、利己・利他的なあり方とそれぞれの国での扱いの違い、そしてそれを応用したケアについても論じ合うことができました。こうした深い議論をすることができたのも、前述の稀有な状況があったからこそであります。こういった場についてありがたいと思うことと同時に、この研修での経験がここからのすべてにおいて生きる経験であったとも思います。

## ■学生 M

今回の国際哲学特講では、半期の授業を通して「ケア」に着目してきた。人間が生きる上で必ず何らかの形でケアという営みが生まれるという、広義的なケアというワードの中でも、私は特に医療におけるケアについて考えてきた。村上靖彦の「ケアとは何か」や、岡野八代の「ケアの倫理」を読みながら、ストラスブール大の学生の人と一緒に考えを議論し、まとめ、発表までを行った。

まず、発表に関しての一番の思いは、もっと良い発表ができたのではないかということである。時間の都合や様々な兼ね合いから、同じグループのストラスブール大の学生と、十分な話し合いの場を設けることができず、結果的にグループとしてまとまりのある発表にできなかったのは反省点だと感じた。一方で、ストラスブール大での二日間の合同ゼミでのディスカッションは非常に有意義なものになったと感じた。それぞれのグループの発表から議題となる様々なテーマを抽出して、それまでのようなzoomを通したオンライン上の会話ではなく、対面で議論することができた。それによってそれぞれのテーマにおける日本とフランスの違いや、フランスに住む人たちのリアルな考え方などを感じとることができたのが今回の合同ゼミの良かった点だと思った。また、それだけではなく、途中の昼休みではストラスブール大の学生に案内してもらいながら昼食を食べる機会もあった。そこでは、今までできなかった

パーソナルな会話もすることができ、ストラスブール大の学生との交友を深めることができたのも良かった点だと感じた。

日程の初日に行われたハイデルベルグ大の学生との合同ゼミでは、フードロスやゴミ問題に関する内容だった。日本でフードロスが問題視され、ある程度の対策は講じられていると思っていたが、ドイツではより深く問題解決に向けた取り組みが行われていることを学んだ。特にペットボトルを細かく分別して指定の場所に入れるというデポジット制度は、ドイツの日常生活に浸透しているのを実際にハイデルベルグ大の学食でみてとても印象に残った。その他にもフードバンクなど日本では普段あまり耳にすることのないワードをハイデルベルグ大の学生の発表から学んだ。そして私がもう一つハイデルベルグ大での合同ゼミで印象に残っているのが、ドイツと日本人々の意識の違いである。上記のような制度的な違いだけでなく、個人個人の環境問題や社会問題に対する意識の違いがディスカッションを通じて強く感じられ、そういった人々の意識が政治に反映されて、結果的に制度として表れているのかと考えた。

最後に、ドイツでもフランスでも様々な場所を観光する時間があった。フランスでは教会や大聖堂、美術館を訪れたが、そこではキリスト教のパワーを感じることができた。一方で、自分のキリスト教に関する知識が浅く、最大限に良さを感じられなかったので、聖書を新約聖書だけでも読んで、知識を深めていきたい。

## ■学生 N

私が今回のアルザス研修を通じて得た知見としては、「実際に触れてみることの大切さ」である。

そして、これまで自身がさまざまな面においてステレオタイプともいえる偏見を抱えていることにも気づくことができた気がしている。そこで、1週間の滞在の中で私自身が気づいたヨーロッパと日本におけるそれぞれの価値観や常識の違いについてまずは振り返ってほしいと思う。

まず、フランクフルト空港に着いて早速目にしたのは犬だった。預け荷物のスーツケースを受け取る場所や空港のゲート付近には犬を連れた人を多く目にした。これは日本では目にすることがない光景だったため非常に印象的であり、最初に常識の違いを感じた瞬間でもあった。そこからホテルに着き、ふとテレビをつけると、テレビ番組の多さに圧倒された。ドイツのテレビは76、フランスも56の番組数があった。日本では地上波の番組数は一般的に12番組ほどであるため、ここにおいても驚きがあった。

そして、翌日のハイデルベルクの街並みを見て特に印象に残っていることとしては、車の駐

車方法である。車はすべて歩道の上に乗上げて車間もそれほどなく1列に駐車しており、前後の車にぶつからないよう器用に車を出して運転していた。歩道に駐車することは日本では禁止されているため目にしたことはなく非常に印象的だった。

また、フランスのストラスブールやコルマルでも多くの常識の違いを感じた。

まず、太陽が昇るのが非常に遅い。基本的に朝8時を過ぎるまでは空は暗く、朝起きるのが大変だった。また、そのことをストラスブールの学生に話したところ、日が落ちる時間が遅い夏の夜は22時を過ぎててもまだ明るく、そういった日に放課後ピクニックを楽しんでいるという解答が返ってきた。日が出ている時間に応じて日常の過ごし方も大きく変わってくるのが非常に面白いと感じた。

そして、ストラスブール大学の学生との合同ゼミのディスカッションの中で特に印象に残っていることは、自己肯定感の捉え方の違いである。自身も含めて日本の学生からの自己肯定感が高い人へのイメージは傲慢かつ自信過剰であるとして、あまり良い意味では捉えていなかった。対して、ストラスブールの学生からはポジティブな思考の持ち主で、かつ周囲のレベルを高めてくれる存在として肯定的に捉えていることが分かった。このような捉え方の違いから足並みを揃えて集団として行動することが正解とされる日本特有の考えを感じるとともに、個人としての立ち位置の違いが感じられた。

ストラスブールの観光で特に印象に残っていることとしては、大聖堂での出来事である。ストラスブールの大聖堂を前に私は写真を撮っていると、そこに道化師のような格好をした女性が近寄ってきて一輪のバラを差し出し、握らせてきた。思わず受け取ってしまったが、同行してくれていた現地の学生や徳江さんが急いでそれを送り返した。後で聞いたところ、バラを渡すことで、受け取った相手に高額な料金を請求する罠なのだという。そのほかにも写真代の請求を目的として集合写真に写り込もうとしてくる道化師にも出くわした。こうした観光場所で詐欺まがいのことが横行しているという新しい認識は観光の要領が日本と大して変わらないだろうという最初持っていたイメージとは大きく異なっていた。

このように、現地の学生との対話や観光を通じて日本との違いを多くの場面において感じ、最初持っていたイメージは塗り替えられていった。

最終日のCEJJAの講演では、どのようにして自分が今ステレオタイプ、偏見の状態にあると認識するか？という質問があった。私はこれについて、実際に触れてみなければ偏見を持っているということに気づくことはできないし、驚きや衝撃を受けることで自身がステレオタイプの状態にあると認識できるのではないかと後になって考えた。今回の研修の中では上記のように多くの驚きや衝撃があったが、それはつまり、無意識に偏見的な予想やイメージを自身で構築していたということの現れであったことに気付かされた。

ステレオタイプに留まった考え方や生き方は人を豊かにはしないし、もったいないと強く感じた。そのため、今後は多様な人や街に出会い、その都度衝撃や驚きを受けながら実際に触れてみることを欠かさない人生を送りたいと初めての海外体験を終えて思った。

このような大切な気づきのきっかけを創出してくれた国際哲学特講とそれを支えてくださった君嶋先生をはじめとした多くの方々に感謝申し上げます。

## ■学生 O

### ・ハイデルベルク大学での合同ゼミナール

「コンビニ」が大きな題材であった合同ゼミナールだった。ドイツ側の発表とその後のディスカッションでは、日本とドイツの消費スタイル、そして環境意識の違いを知った。このことは自らの環境倫理を問い直すきっかけとなり、普段の哲学に関する学習では得られない学びを得ることができた。また、自分からは小説『コンビニ人間』についての発表を行った。作品を何度も読み直すことで、その度に新たな読解の可能性に出会い、そこで提起された実存的な問題をうまくゼミナールのメンバーに伝えることができたように思う。

### ・ストラスブール大学での合同ゼミナール

数ヶ月にわたって「ケア」についてストラスブール大の学生と話し合い、共同で発表資料を制作した。日本語ネイティブ同士でも話し合うことが難しい抽象的な概念について議論することもあったが、さまざまな角度から粘り強く説明をすることで共通の理解を得ることができた。用意したスライドはやや情報量に欠けるものであったが、発表担当の各員はそれぞれに十分な説明を加え、その後のディスカッションでは他のグループのメンバーとも実りのある議論ができた。

### ・観光

まず驚いたのは、ハイデルブルク大学が持つ歴史の長さである。国民国家としてのドイツの誕生よりももっと長くその地域を自治していたという事実は、学生牢の存在や町並みから伺うことができ、非常に新鮮であった。また、ストラスブールの観光では、ウンターリンデン美術館で鑑賞した石の彫刻や、街の建物の外壁に彫られた石像から、ゴシック的な美的感覚を感じ取ることができた。そしてストラスブールのノートルダム大聖堂では、それがキリスト

教と合一し、壮麗で巨大な建築物を作り上げるに至った当時の様子を想像し、大きく感銘を受けた。

また、フランスのレストランや土産屋などでは、フランス語でコミュニケーションをとることができ、非常に貴重な経験だった。しかし、自分の語学力の限界を知る機会にもなり、今後の学習のモチベーションにもつながった。

## 5 写真でたどるアルザス研修

研修の様子を収めた写真を紹介します。





■ 学生率とハイデルベルク城にて



■ ストラスブール大学との合同ゼミ





■ ストラスブール大聖堂とそのバルコニーにて



■ ユマニスト図書館にて



■ マティアス先生の講演



■ 食事風景





